

## 黙禱の社会習慣を育て合おう



東京南 安積 得也

黙禱は日本の社会習慣となつたであろうか。黙禱が特定の場所(例えば日本武道館)において、特定の人々(例えば招待された人々)によつて行なわれる場合は、見る目にも整然と行なわれるのであるが、例えば駅の待合室とか、ホテルのロビーとかいうような、不特定多数の人々が漫然と来合わせるような場所

では、果してうまく行くであろうか。

戦前の関東大震災(大正十二年九月一日)の記念日には、午前十一時五十八分のラジオの点鐘を合図に一分間の黙禱が行なわれた。しかしそれは一般市民の実生活にとけこんで、家庭でも学校でも職場でも街頭でも自然に行なわれるような社会習慣にまで定着したであろうか。

昭和初期のある新聞社説は、わが国民に宗教的情操の訓練の乏しいことを論じて、震災記念日の銀座街頭における一分間の黙禱に触れた。そして「其の日其の時、交通繁き尾張

町交叉点附近における日本人は、一人として佇立黙禱をなしたるものなく、黙禱をなしたるものは異国の一紳士、実は斯くいう自分一人であった」という在留一外人の故国新聞への報道を引用した。

関東大震災から五十六年後の今年の八月十五日は、三十四回目の終戦記念日であった。日本武道館における戦没者追悼式を主催した政府は、「正午から一分間の黙禱をささげよう」報道機関を通じて国民に呼びかけた。私はその現実の場面をこの目で確かめようと、自分自身銀座尾張町の交叉点に立った。

私のねがいははずれた。正午12時にその場その場に立って黙禱したと認められる通行人はただの一人も見出すことができなかった。

私は四十年前に二年にわたり滞留していたイギリスでの大衆の黙禱を思い出すのである。それはヨーロッパでの年中行事である平和記念日の正午の黙禱である。私が出会ったのは一九三三年十一月十一日の平和記念日であった。その日の正午にはイギリスのどこにおいても人々は立ちどまって平和の黙禱をするのだときかされていたが、私はわざわざ人出の多いトラファルガル・スクエアに出て見た。いっぱいの人だ。

正午になった。号砲と同時に車という車は悉くとまった。すべての歩行者はその場に佇立して黙禱した。誰かが号令するのでもない。群集一人一人の思い思いの黙禱が行なわれながら、何か自然の一致がそこにあるように感じた。すべての音という音が、しばしの間消えたというのが実感だった。一つの例外があった。ネルソン塔にとまっていた一羽の鳩が飛びたつたのである。バサバサという羽ばたきが、わずかに静寂を破つたのである。

ことは国際児童年である。すべての国の児童たちは、それぞれの国の宗教的風土の中で21世紀の国際人へと成長して行く。もし日本の義務教育が、宗教情操の榮養供給の回避

又は怠慢のために、21世紀に向かつて實際を送り出すことになれば、その責任大である。

黙禱の問題を考えながら、私は21世紀本人のことが気になるのである。

(東京都・新生活運動)